奈良今昔写真 WEB 蔵

興福寺　航空写真
昭和 30 年代末

興福寺境内北に旧奈良県庁舎が見える。
手前は猿沢池。

写真提供：谷井孝次氏

ＪＲ東海『うまし　うるわし奈良』公式ホームページ

出典　https://nara.jr-central.co.jp/

興福寺　中金堂編　1300 年前をよみがえらせろ！
中金堂復興に挑んだ人々、四半世紀の物語

1300 年の歴史の中で、度重なる火災に遭いながら、その度、不死鳥のように蘇ってきた興福寺の中心堂宇（どうう）「中金堂」。しかし、江戸時代の焼失後は、それまでのような天平規模・天武様式による再建が叶うことなく、約 300 年もの歳月が過ぎ去った。その長い空白を四半世紀かけて動かし、平成の復興を実現したのは、多川俊映貫首（たがわしゅんえいかんす）をはじめとする、人々の情熱だった---

興福寺で生まれ育った多川貫首は、幼い頃、春が来るたびに繰り返された光景を“心の痛み”とともに覚えている。

昭和30年頃。興福寺の桜が咲くと花見のため、人々は境内に押し寄せた。敷物は新聞紙、一升瓶や折り詰め弁当を持参しての宴会がそこかしこで開かれた。問題は、宴の翌日だった。当時、ゴミを持ち帰るマナーのある人はごく少数だった。散乱した紙クズ、空き瓶、残飯。雨が続けば片付けもできず、無残な光景が続いた。

「昔の日本はモラルが育っていなかったということもありますが、当時の境内に天平時代の整った美しさがあれば、人々がゴミを捨てて帰ったりはしなかったでしょう」

多川貫首は、この時の深い悲しみが自分の胸の奥底にあり、後の原動力になったのではないかとも考えている。

雑然とした境内、鬱蒼と茂る木々。信仰の中心である中金堂は、江戸時代に建てられ、朽ち果てたままの仮設の中金堂――。

壮麗な天平の空間は、なぜ、そこまで荒廃したのか。

焼失と復興を繰り返した歴史の中で、中金堂は7回罹災している。平安時代は3回の大火に加え、平重衡による「南都焼き討ち」にも見舞われた。後の時代にも火災は繰り返されたが、朝廷や幕府の支援を得て再建は果たされていた。

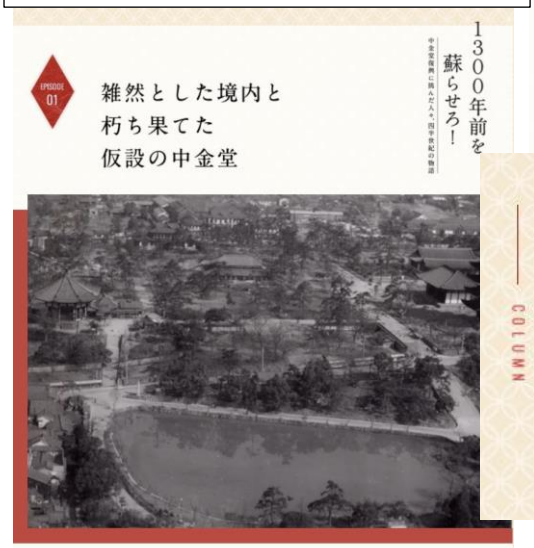
しかし、江戸時代の焼失後は再建の道が途絶える。それから約100年後に建てられた仮設の中金堂は、雨漏りに悩まされるようなものだった。

時代は明治期を迎え、神仏分離・廃仏毀釈の嵐が日本中の寺院を荒廃させた。藤原氏の氏寺である興福寺は、藤原氏の氏神を祀る春日大社と一体化していたため、より大きな混乱に陥った。

公家出身の寺僧たちは還俗し、春日大社の神主になるなどした。そのため興福寺は、責任者である住職がいない「無住」の寺となり廃寺へと追い込まれてしまったのだ。寺領は官有地になり、子院の仏像や経典が流失、焼失。五重塔が売りに出されそうになったことさえある。

さらに、境内は大部分が公園として利用され、奈良公園となった。名勝公園化で進められた植樹は、堂宇を樹々の影で覆っていった。垣根も取り払われ、公園部分との境界はいよいよ曖昧となり、興福寺はやがて「公園の中の寺」に変貌していった。

エピソード 01
雑然とした境内と朽ち果てた
仮設の中金堂



COLUMN

中金堂落慶によせて

境内整備がはじまる以前、観光客と思われる方が五重塔を見ながら「これは興福寺ですよね」とおっしゃって、次に南円堂を指し、「あれはなんというお寺ですか？」とお尋ねになったことがありました。笑い話のようですが実際、当時の境内は森のような樹々で見通しもきかず、お寺の中心もわからない有様でした。一日も早く中金堂を中心とする整然とした境内を取り戻し、「天平への回帰」を実現するのが、私たちの役目だと痛感した出来事の一つです。

多川俊映（興福寺貫首）

1947年生まれ、奈良県出身。1990年より中金堂再興を含む「興福寺境内整備計画」を推し進めている。